

令和6年度第5回人間文化研究機構教育研究評議会 議事概要

- 日 時： 令和7年3月12日（水） 10:00～12:10
- 場 所： TKP 東京駅カンファレンスセンター カンファレンスルーム1A
- 出席者： 井上、宇田川、内田、神作、木部、栗本、クレインス、酒井、佐藤、設楽、高野、田中、陀安、西谷、野家、速水、堀、前川、松本、宮崎、山極、吉田（和）、吉田（憲）、渡部の各評議員
- 陪席者： 若尾理事、井野瀬監事、井上監事、井上事務局長
- 事務局： 監査室長、歴博、国文研、国語研、日文研、地球研及び民博の各管理部長、本部事務局の総務課長、研究企画課長、財務課長、その他関係職員
- 概 要：
- 議事に先立ち、事務局から、会議の定足数を満たしている旨の報告及び配付資料の確認等があった。
- 議 題：
- （議事概要）
- （1）令和6年度第4回議事概要について（資料1）
- 機構長から、令和6年度第4回教育研究評議会の議事概要について報告があった。
- （審議事項）
- （1）人間文化研究機構組織規程の改正等について（資料2）
- 宮崎理事から、資料2に基づき、人間文化研究機構組織規程の改正について説明があり、審議の結果、了承された。
- （報告事項）
- （1）人間文化研究機構長の業務執行状況の定期評価の結果について（資料3）
- 事務局長から、資料3に基づき、人間文化研究機構長の業務執行状況の定期評価の結果について報告があった。
- （2）第6回人間文化研究機構日本研究国際賞受賞者の決定について（資料4）
- 若尾理事から、資料4に基づき、第6回人間文化研究機構日本研究国際賞受賞者の決定について報告があった。
- （3）人間文化研究創発センターの活動状況について（資料5）
- 栗本理事及び堀理事から、資料5に基づき、人間文化研究創発センターの活動状況について報告があった。
- （意見交換）
- （1）各機関からのトピック報告・意見交換（資料6）
- 井上日文研所長、山極地球研所長及び宇田川民博副館長から、資料6に基づき、各機関の研究に関するトピックについて報告があった。
- また、本件に関し、以下の意見があった
- ・ 日文研の国際コンソーシアムが大変素晴らしい。コンソーシアムのネーミングについて、「国際日本文化研究」コンソーシアムではなく、「国際日本研究」コンソーシアムとなっているが、ネーミングの意図があるのか。また、これからの方向づけについて伺いたい。
- コンソーシアムでは、文化研究に限らない分野の研究者が参加しているため、文化を入れて

いない。なお、現在、事務処理が仕切れないほど加盟の申し出が来ているため、コンソーシアムへの加盟を呼びかけたが返答のなかった機関等に対し、改めてこちらから積極的に加盟を呼びかけることまでは対応できていない。また、理系研究者など日文研では対応しきれないところからの問合せも来ることがあるため、今後、機構全体でバックアップしてもらえることを望みたい。

(2) 教育研究評議会における外部委員からの意見の対応について（資料7）

若尾理事から、教育研究評議会における外部委員からの意見の対応に関連して、歴史文化資料保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業（以下「歴ネット事業」という。）について報告があり、意見交換を行い、以下の意見があった。

- ・ 歴博以外の機構内の機関と連携して、歴ネット事業に取り組んでいくという構想はあるのか。
- 歴ネット事業には、歴博以外の研究者が、機関を越えて関わっている。今度も基盤づくりのために努力していきたい。
- ・ 釧路沖地震や南海トラフ地震は差し迫った課題だと思うので、被害が想定される地域の大学にも歴ネット事業に加わってもらえるよう、全国的な組織づくりへ早めの働きかけを行っていった方がよい。
- 各大学と個別に協定を結んだり研究集会を開いたりして歴ネット活動への働きかけを行っている。現在参加していない地域について、今後も働きかけを続けていきたい。

(3) 中期的視点からの機構の役割等について

「中期的視点からの機構の役割等について」をテーマに意見交換を行い、以下の意見があった。

- ・ 人文学以外の分野の若手研究者から人文学のデータベースに関心を寄せられている事例があった。人文学以外の分野の方にも人文機構のデータベースを知ってもらうことで、人文学以外の分野の研究に活かせる可能性もあるため、人文機構のデータベースなどの取組みを人文学以外の分野の若手研究者などにも広報できるとよいだろう。
- 広報については、常に課題であると認識している。Webでの発信だけでなく、実際に自分たち自身が外に赴いて発信していかなければならないだろう。
- ・ 人文知コミュニケーターになることはその後の就職にプラスに働いているか。
- 人文知コミュニケーターの経験とその後の就職の関係については、現在のところはっきりとしたデータはないため、今後調査していきたい。
- DHに携わっていたことは、デジタル化などの面で、その後の就職にかなり大きな強みになっていると考える。
- ・ 創発センターの研究員がその後他の機関や大学に移った先で、人文機構の取組みを周知していくとより広がっていくのではないかな。
- ・ 広報について、情報をまとめたものを作るとよいのではないかな。
- ・ STEAM教育に関わる女性が少ないと議論されている中で、どんな人が関わり、どういうプロセスを経て研究者になっているのか、研究の面白さ、分野の魅力を顔の見える形でアピールすることで、次世代の小・中・高校生たちに伝えることができるのではないかなといわれている。理系に限らず、人文学でも、研究者の顔の見える形で、研究者になるプロセスや魅力的な研究をリアルの場でアピールできたら効果的ではないかな。
- ・ 若手研究者にとって自分のキャリアパスが見えないことは不安なので、今後も機構を挙げて、キャリアパスを持続可能で明確なものとする努力をしてほしい。

以上